

カリヨン

CARILLON

日本赤十字秋田看護大学 日本赤十字秋田短期大学

P2-5... **1年間を振り返って**
～イベント・活動報告～

P6... 短期大学 介護福祉学科の教員が
文部科学大臣より表彰を受けました

P7-15... **特集**

教員・学生・職員がオンライン授業を振り返る

コロナ時代でも 学びを止めない

P16... **CARILLON INFORMATION**

2020年度



○カリヨンとは（フランス語：Carillon）
教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方（現フランス領）で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学園祭も「カリヨン祭」と呼んでいる。

No.10

≪ イベント・活動報告! ≫

1年間を振り返って



ルーブリック研修会 2020年2月13日

京都橘大学の西野毅朗先生をお招きして、FD・SD研修会「ルーブリックを活用して学習成果を可視化する」を開催しました。ルーブリックの作り方・使い方、メリット・デメリット、ペーパーワークまで盛りだくさんの2時間でしたが、ときおり笑いも起こる楽しい研修会となりました。



2月21日

ティーチング・ポートフォリオ (TP) 研修会

佐賀大学の皆本晃弥先生をお迎えして、FD研修会「ティーチング・ポートフォリオとは？」を開催しました。TPとは何か、教育改善サイクル、作成メリット、構造と構成要素、メンターの質の重要性、TP作成法など詳細なご説明をいただき、非常に貴重な示唆が得られました。



教職課程FD研修会 6月15日

秋田県立大学の高橋秀晴先生をお迎えして、「好機到来! か?—教職課程の前途やいかに—」と題した研修会を開催しました。本学は秋田県で唯一の養護教諭養成課程を持つ大学として社会から期待されており、1期生、2期生について大事に育てる必要があることを強調されていました。





8月5日

救護看護婦像の慰霊清掃

日本赤十字社看護師同方会秋田県支部会員の皆さまが、赤十字救護看護婦像と殉職救護員遺影を清掃され、その御霊を慰められました。救護看護婦の皆さまの「二度と戦争を繰り返してはいけない」という思いを受けとめ、平和や命の尊さ、赤十字の理念を改めて深く胸に刻んだ一日でした。



9月19日

秋のオープンキャンパス

秋のオープンキャンパスを対面で開催しました。今回は感染予防措置を行い、事前申し込みの定員制で、時間を短縮して実施しました。なお、例年好評のドクターヘリ見学体験・模擬授業・学生インタビューをWeb上で公開していますので、本学ホームページをご覧ください。



9月25日

看護学部の合同就職説明会

各地の病院から、看護部長さんや担当職員の方々が、看護師として活躍している本学卒業生と一緒に参加してくださいました。今回は新型コロナウイルス感染対策のため、秋田県内の施設に限定しての実施でしたが、学生たちは説明に熱心に聞き入り、さまざまな質問を投げかけ、将来の看護師としての自分自身のキャリアに対する関心と意識の高さがうかがえました。



連携協力協定締結式 10月21日

看護学部の教育にご協力いただいている2つの社会福祉法人と、相互の密接な連携と協力により、地域の課題に適切に対応し、地域住民の健康増進およびヘルスリテラシーの向上、活力ある地域社会の形成と発展、及び人材育成に寄与することを目的に、包括的連携協力協定を締結しました。



スポーツ・フェスティバル 10月24・25日

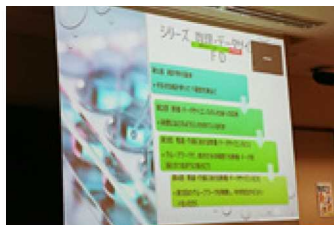
学友会主催による毎年恒例の「スポーツ・フェスティバル」が今年も開催されました。感染予防措置を実施して規模が縮小されての開催でしたが、初日はバスケットボール、2日目はバレーボールで、多くの学生たちが体育館で汗を流し、互いの友情を深めました。



10月24日

父母の会 個別相談会

本学は保護者の皆さまと「父母の会」を組織し、大学とのコミュニケーション向上を図るとともに、進路支援活動や学修環境向上に取り組んでいます。今年度も保護者と学修支援アドバイザー教員との個別面談を開催し、日ごろの様子や学修状況、進路など、さまざまなご相談に対応いたしました。



10月29日

データサイエンス FD研修会

秋田県立大学の木村 寛先生をお迎えて、FD研修会「統計学の基本」を開催しました。政府が策定した「AI戦略 2019」では、各大学で初級レベルの数理・データサイエンス・AIを習得させることを求めています。本学では、数理・データサイエンス・AIと社会とのつながりについて教えることができる教員の養成をめざし、「数理・データサイエンスFD」をシリーズ化して実施します。



11月11~13日

看護学部卒業研究発表

看護学部の卒業研究発表が3日間にわたって開催されました。卒業研究は看護における課題解決に取り組む基盤を身につけるため、各自が具体的な研究計画書を作成して研究を進める授業です。4年生は緊張しながらも、今まで努力してきた成果を精一杯、自作のポスターを使い発表しました。



短期大学 介護福祉学科の教員が 文部科学大臣より表彰を受けました



短期大学教育制度創設70周年記念 短期大学教育功労者表彰状の伝達
前列左から土室修教授、安藤広子学長、高橋美岐子教授
※撮影時のみ、マスクを外しています。

文部科学省は、2020年が短期大学教育制度の創設から70周年を迎えることを記念して、短期大学教育に長く従事し、その功労が顕著な者及び短期大学教育に特に功績があった者を表彰し、その功に報いるとともに、短期大学教育の発展に資することを目的として、短期大学教育功労者表彰を行いました。

本学では、介護福祉学科の教育に長く従事した教員2名を被表彰者として推薦しておりましたが、このほど文部科学大臣より短期大学教育功労表彰状が交付されましたので、11月17日に短期大学表彰状の伝達を執り行いました。

Message メッセージ

介護福祉学科

高橋 美岐子 教授

この度の受賞にあたっては、学生の皆さまはじめご支援をいただいている関係各位に改めて感謝申し上げるとともに、これまでの介護福祉教育に対する表彰であると認識を新たにしたいところであり、喜びを分かちあいたいと思います。

短期大学の使命と赤十字の理念を建学の精神とした本学は、開学以来、介護福祉の担い手を育成する本県及び赤十字唯一の高等教育機関として、この地で25年間地域と共に歩み、歴史を刻んできました。卒業生の多くは地域社会の中核的人材として活躍しており、頼もしい限りであります。今後、地域における介護福祉の牽引者として、さらに躍動することを期待しております。

本学では、短期大学として多くの課題がありますが、受賞を一つの区切りとして、若年層が地元に着し、学生が希望をもって巣立つことができるよう、さまざまな面からサポートしていきたいと考えております。また、少子・超高齢社会の先端を行く秋田県において、本学が地域住民から選ばれ、地域社会から必要とされる身近な短期大学であるよう、今後もその一翼を担うべくなお一層の研鑽を積んで参りたいと考えております。

介護福祉学科

土室 修 教授

短期大学では、20年以上介護福祉教育に従事してきましたが、このたび、文部科学省から短期大学教育功労者表彰をいただくことができました。振り返ると、決して順風満帆な教員生活ではありませんでしたが、多くの教職員の皆さま方から力をいただき、時には支えられ、今日まで来ることができました。改めて感謝申し上げます。

社会の変化に伴い、短期大学の状況や介護福祉教育を取り巻く環境は、驚くほど変化してきました。それでも、短期大学には、課せられた使命があります。移りゆく社会を見据え、社会の要請に応えることができるよう、微力ながら今後とも短期大学教育に注力していきます。



高橋 美岐子教授

土室 修教授

特集：教員・学生・職員がオンライン授業を振り返る

コロナ時代でも 学びを止めない

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、看護学部ではオンライン授業を実施。
準備と数々の決定、そして実施には、さまざまな苦勞が伴いました。でも、学びは止めない——。
教職員と学生が2020年・コロナ時代の教育を振り返ります。





INTERVIEW

01

プロジェクトの中心メンバー

看護学部

阿部 範子 准教授

オンライン授業で得た新しい発見を、これからも生かしたい。

オンライン授業プロジェクトチームの中心となった阿部准教授にお話を伺いました。

2020年3月初旬、県内で初めて新型コロナウイルスの感染者が判明。看護学部において対面授業を避け、オンライン授業を実施すべきと判断したのはそのときだったとのこと。

「3月12日には看護学部教務委員会でオンライン授業の推進を決定し、情報システム委員会へ準備期間と費用の試算を依頼、その結果を踏まえてオンライン授業への切り替えと、学内の諸整備・プロジェクトチームの立ち上げを提案しました。オンライン授業開始に向けた整備では、どのようなシステムを使うかの検討や、夏期休暇や看護学実習など学生への影響を考え、準備期間を4月6日から2週間と設定し、この間の授業延期を学内で承認いただきました。国の法令では一定の条件のもと、教室での対面授業に代えてオンライン授業を認めています。本学ではオンライン授業に向けて、学則の一部変更を要しましたが、これも準備期間内で完了しました。ところが4月中旬の緊

急事態宣言発出を受けて、秋田県知事より県内大学へ臨時休業の要請がありましたので、準備期間を再延長することを決定し、最終的に5月の連休明けにオンライン授業を開始しました。」

さまざまな要件が絡み合い、同時進行しながらクリアすることが求められた準備期間。大学側の環境整備はもちろん、学生の受講環境への配慮、教員の環境やスキルのサポート。システムひとつとっても、使いやすさやセキュリティーの問題、予算との兼ね合いなどを考慮して進めていったと振り返ります。

「実施に至るまで、プロジェクトチーム以外の教員からの丁寧な技術提供、他の教職員や学生の協力もありました。そして実際にオンライン授業が始まると、想定した以上にいろいろな問題がありました。Zoomアカウントの同時使用によるシャットダウンもありました。そして受講学生にはさまざまな負担を掛けてしまいました。これまで理解度を測るために行っていた筆記試験は、対面を避ける必要があるため実施できません。代わりにレポート課題の提出が増え、これが学生の負担

を大きくしました。また、授業前には資料データをオンラインで共有し、学生には各自で印刷をしてもらいましたが、これも印刷費の負担がかさんでしまうという意見が寄せられました。」

教員に対して、オンライン授業で配慮を依頼した部分がありますか？

「一方的な配信ではなく、学生と双方向のやりとりができる配慮をお願いしました。また、授業目標が達成できるよう工夫をお願いしました。学生からもさまざまな意見をもらいましたが、幸いオンライン授業を否定するだけの意見は、ほとんどありませんでした。対面授業より質問しやすいという意見もあり、学修内容の深まりや視点の拡大につながる大きなメリットを感じました。学生たちが将来、対人援助職に就くことを考えますと、日常的な他者との接触やコミュニケーションは欠かせません。本学では国の方針に沿って対面授業を基本にしたいと考えていますが、これまで蓄積してきたオンライン授業の良さを、今後の教育改善に取り入れていくことも大切だと考えています」。



INTERVIEW

02

プロジェクトの中心メンバー

看護学部

小野 麻由子 講師

授業の目的を改めて見つめ直し、設計する良い機会に。

阿部准教授とともに、プロジェクトチームの中心メンバーとしてさまざまな準備に奔走した小野講師にもお話を伺いました。

新型コロナウイルス感染拡大により「これは何かしらの策を講じなくてはならない」と感じたのは、県内での感染者が発生したこと、そして全国緊急事態宣言が発出されたことだったと振り返ります。

「文部科学省の通知などから国の動きを把握し、他大学のオンライン授業への取り組みなどの情報を集めました。また、オンライン授業のツールの選択や学生の自宅のインターネット環境の調査なども、プロジェクトとして行いました。常時接続ができるWi-Fi環境があるのか、PCなどのハードウェアについての状況、資料をプリントアウトできる環境がどうなっているのか。その他、オンライン授業対応可能科目の調査、オンライン授業用配信室の設置、専従SE（業務委託）を配置したシステムトラブル対応窓口の開設に加え、本学におけるオンライン授業の手引（学生向け・教員向け）もプロジェクトで作成しました。全学年一斉のトライアル実施や、教員向けのオンライン授業説明会を実施して、不

安や疑問の解決を進めました」。

教員の方々や学生たちへ、オンライン授業にあたってどんなお願いをしましたか？

「一番大事なことは、学生たちの学びを止めないということ。教員の皆さんへは、新たな考え方に切り替える必要があることをお伝えしました。細かい配慮についてはオンライン授業の手引に記載して、共有できるようにしましたね。また、学生にはこれまで以上に主体的な授業への取り組みが必要であることを説明しました。教員だけでなく、学生だけでなく、ともにこの難局を乗り越えていきましょうと伝えました。その意識がなければ、乗り越えるのは難しいと感じていましたので。実際に実施してからは、やはり資料印刷の負担が問題となり、全教員に対し授業資料の改善や工夫をお願いしました。また、学生からは目の不調や肩こり、課題の多さなどの意見がありましたので、授業内での休憩を設けることや、課題の量や質についての工夫を教員の皆さまにお願いしました」。

解決しなくてはならない問題点が数多く発生した一方で、オンラインでの授業によるメリットはどんなことでしたか？



「改めてこれまでの授業設計を見直す機会になったと感じています。そもそも、この授業を通じて学生に何を伝えなければならないのか。目的を明確にした上で、どう工夫すべきなのかを改めて見つめ直すことになりました。また、2週間という限られた時間のなかでは、スピード感を持った意思決定とリーダーシップ、さまざまな場面を想定した丁寧なシミュレーションを兼ね備えた、そんなプロジェクト運営が重要なのだと実感しました。より良い教育を提供しようという意識を持ったメンバーは、お互いに信頼できる仲間であると実感できたことも、コロナ禍における収穫のひとつだと思っています」。



INTERVIEW

03

オンライン授業を実践した教員

看護学部

齋藤 貴子 准教授

学生たちの学びに向かう真摯な姿勢を改めて感じました。

実際にオンライン授業を実施した齋藤准教授。前期に担当した授業は、主に「成人看護学Ⅱ - 2慢性看護」と「成人看護学Ⅲ」の看護過程でした。どちらもTBLというアクティブラーニングを取り入れるため、オンラインで実施できるのかということが一番の懸念事項だったと振り返ります。

「TBLを取り入れるための情報収集を自ら行い、得られた情報をSlackを活用しすぐに丹治先生と共有しました。私と丹治先生はICTや情報リテラシーが学内教員では比較的高いほうだと思ったので、私たちが率先してZoomのブレイクアウトセッションの機能を使ってTBLを実施することに決めました。その後、学生のネット環境、マイクやカメラなどのデバイスの調査を行いました。その上でブレイクアウトセッションに遷移できるシステムを整えて、学生に協力してもらい、トライアルを実施したところ、突然セッションがBAN（利用停止）されてしまったのですが…。いろいろなトライアル&

エラーを繰り返しましたが、学生の反応が非常に早くて、しかも詳しく、助けられました。おかげで反省すべき点もわかりやすいです。反省点を反映するために、翌週の授業からの変更点をGoogle Classroomを使って予め周知するようにしたことで、よりの確な改善が実現できたように思います。学生たちは普段から使い慣れているLINEを活用して、友人同士でフォローしあってくれていたみたいです。授業も回を重ねるごとに、グループワークへ移動するのがスムーズにできるようになり、話し合いも濃密になっていました。その様子を見て、丹治先生と感動したほどです」。

オンライン授業のためにこれまでとは異なる準備をされましたか？

「改めて授業の展開の枠組みを整えて、事前に学生に周知することが求められたのですが、オンラインかどうかに関係なく、それがとても大切なことだとわかりました。また、学生からの反応にすぐ対応することがこのオンライン授業を成功させ

るためにとても重要だと感じています。準備と運営、さまざまな対応はとても大変でしたが、フォームを使った学生からのレスポンスが素晴らしく、学生たちの反応に頑張る力をもらいました。授業に対する評価もとても高く、ありがたかったです。授業のひとつの形態として、今後も活用できると思います。教員の工夫は求められますが、対面授業よりも良い部分があると感じました。学生からも、はじめはとても戸惑ったけど、オンラインでの授業のほうが楽しいという意見もありました。対面よりも良い面もあるんだと感じましたね」。





INTERVIEW
04

オンライン授業を実践した教員

看護学部

丹治 史也 助教

学生たちの気持ちに寄り添う姿勢は、オンラインでも大切。



齋藤准教授とともにオンライン授業にあたった丹治助教にもお話を伺いました。「秋田ではそこまで危機感が強くなかった2020年3月ごろ、東京で大学教員をしている友人がオンライン授業の話をしてきたこと、また、同様の情報を齋藤准教授が入手されていたこともあり、本学でもオンライン授業という対応が必要となるかもしれないと思っていました。

教員と学生の双方が、オンライン授業が成立するレベルまでツールの使い方を短時間で習得できるのか、学生への学習効果が低下しないか。それが真っ先に懸念されたことでした。実際にオンライン

授業を始めて苦慮したことのひとつは、私たちが担当した授業は金曜日の5限であり、学生たちの心身の疲労度が高かったこと。そこで、学生を労いながら、授業を早く終了して自己学習時間を増やすなどの工夫をしました。また、毎回授業後に授業への感想や要望、今つらいことなどを Google フォームを活用して聞き取り、次の授業にはその内容を反映するというPDCAサイクルを意識しました。2つ目はグループ演習科目の準備です。Zoom上でグループワークができるという情報を得たのは良かったのですが、はじめはなかなかうまくいかず、苦労しました。デモアカウントを使用して、教員側からだけでなく、学生側の両方の視点で操作の事前確認を行うことで、改善を図りました」。

オンライン授業に際して、どんな準備をされましたか？
「学生側の資料印刷費の負担を減らすこと、Zoomへの出入りに要する時間などに配慮して、授業時間に余裕を持つ必要

があり、授業資料の見直しとスリム化が求められました。教科書を活用すること、 unnecessary スライドを減らすことができたと感じています。また、2年生はグループ演習科目もあったことから、マイク機能や Zoom での画面共有機能は必須でした。そのため、学生側にマイク機能があるか、なければ代わりになるものはないかなどの調整を行いました。おかげでスムーズに授業を開始することができたと思います。授業中に学生たちにマイクを振ったり、チャットで回答してもらったりと双方向性のある授業になりました」。

振り返ってみて、オンライン授業について思うことはありますか？

「学生たちからはさまざまな困惑や意見がありましたが、セメスター中盤からは否定的な意見はほとんどありませんでした。グループワークの効率化や資料のペーパーレス化、学生との情報共有や面談もオンラインで対応できるようになり、オンラインにも良い部分があると感じています」。



INTERVIEW

05

プロジェクトメンバー

学務課 教務係

鎌田 隆一 係長

学務課 教務係

島垣 理沙 主事

学生たちの学びを止めないよう、サポートを行っていきたい。

学生中心の教学支援を担当されている学務課教務係長の鎌田さん、教務係主事の島垣さんにお話を伺いました。

鎌田「4月上旬の時点では4月半ばから対面授業を開始、可能な科目についてはオンライン授業も実施する方針でしたが、感染拡大により緊急事態宣言が発出されたことで授業開始が延期になりました。その時点で、オンライン授業検討プロジェクトが立ち上がりました」。

鎌田係長はオンライン授業のツールにZoomが採用されたことで、実際の契約と配信室の設置を担当。その他に学務課としては、オンライン受講の環境が整っていない学生には学内のOA教室で受講できる環境を準備。また授業中のトラブルへの相談窓口として、受付用メールアドレスを設置してスムーズなオンライン授業の実施をサポートしました。

島垣「ゴールデンウィーク明けから授業が開始となり、オンライン授業も開始されました。やはり、スタートしたばかりのときはトラブルの相談も多かったで

す。多くあったのは、音声聞こえない、ログインができない、回線が繋がらない、スマートフォンやパソコンなどの不調によって授業が受けられないなどでした。通信トラブルなどで授業が受けられなかった学生に対しては、講義を録画したデータを渡して対応しました。ホストに承認してもらえないといった場合は、実際に授業を行っている先生のところへ赴いて対応したりすることもありました。Zoomの使い方に教員も学生も慣れるまでは、トラブルの相談がよく発生していましたが、学生たちはツールの使い方などに慣れるのがとても早く、後半はメールでの相談もほとんどありませんでした。ただ、資料の印刷代がかさむという相談に加え、もっと早く資料のデータを送ってほしいといった要望もありました。自宅での印刷が難しく、コンビニエンスストアで事前に印刷する学生もいたので、経済的にも大変だったと思います」。

看護学部以外の介護福祉学科や大学院

については、対面授業が継続されていましたが、どんなサポートをされましたか？

鎌田「対面授業を継続する介護福祉学科や大学院については、三密を避けるために講義室の机の間隔を空けたり、消毒液などを講義室の前に設置したり。講師用のデスクには飛沫防止の透明ビニールシートを設置するなど、想定できる一般的な感染防止策を行いました」。

今回のオンライン授業の実施を通じて職員として感じたことはありますか？

鎌田「授業の質を担保し、学生たちの学びを止めないよう、これからもできる限りのサポートを続けたいと思います」。





INTERVIEW
06

オンライン授業を受けた学生

看護学部 3年生

能登 星河さん

この状況下でも学びの環境を整えてくれたことに感謝したい。

オンライン授業というこれまで経験のないスタイルで、2020年度の授業がスタートすることになった学生の皆さんにもお話を伺いました。

看護学部3年生の能登星河さんは、新型コロナウイルスについて報道されるようになった当初、それほど深刻なことではないだろうと思っていたそうです。「日本を始めとした世界の医療は進歩しているから、何かしらの治療方法が見つかって、すぐに収束するだろうと考えていました。しかし、今までテレビで見ていた芸能人の感染や訃報、日本だけでなく世界中で次第に増えていく感染者数のこと…。毎日、新聞もテレビも新型コロナウイルスの情報で溢れていきました。今では、手洗いうがいなどの感染予防はもちろん、外出時にはマスクをするのが当たり前。予防対策をしていない人は非難されるようになりました。密を避け、ソーシャルディスタンスが叫ばれるようになり、人と人との物理的な距離が、社会的な、そして心の距離にもなってしまったと感じます」。

当初、大学からこれまでのスタイルで授業ができないという連絡を受けたとき、どんなことを感じましたか？
「対面授業の場合は、周囲の友人たちの頑張りを目にすることで自分も刺激を受けて頑張っていた部分があったのですが、オンライン授業だとその部分がなくなってしまい、マイペースが度を越してルーズになってしまうのではという不安がありました。実際に始めてみて不便に感じたのは、通信状態によって課題の提出や出席などに影響が出てしまうことです。私の方では送信したことになるのに、先生には届いていないことが何度かありました。出席の状況や課題の提出そのものは、成績に大きく影響する部分なので、先生に何度も確認するということがありました。オンライン授業スタート前には怠けてしまうのではと心配がありましたが、実際には先生たちから見えていない分、頑張らなきゃという気持ちになりましたし、この状況の中でも授業を受けられることに感謝しています」。

今回の感染拡大そのものに対して感じたことを教えてください。

「医療体制が逼迫していることなど、毎日報道されていることを見ると、早く自分もその戦力として役に立ちたいという思いと、一方でこの状況で十分に学びを修得して無事に国家試験に合格することができののだろうかという不安があります。それでも、学ぶことができる環境に感謝を忘れずにたいです。人の命を守るために、正しい医療の知識や技術が必要であると改めて感じ、より一層勉学に励みたいと思っています」。





INTERVIEW

07

オンライン授業を受けた学生

看護学部 3年生

松本 茜さん

友人たちと会って話せる日は、いつ来るのだろうかという不安。

看護学部3年生の松本茜さんにも、オンライン授業についてお話を伺いました。「3月ごろ、新型コロナウイルスの影響から関東の大学では入学式が中止になったという話が聞こえてきて、私たちはどうなるんだろうと不安を感じていました。もちろん、ワクチンなどもないし、罹ってしまったらどうしよう、と。また、3年生で行う予定の宣誓式も実施されないのではと思っていました」。

実際、宣誓式は中止になりましたね。「2年生のとき、3年生の先輩たちの宣誓式に参列したのですが、自分も来年この式を迎えるんだと考えていましたし、実習が始まる前にこの式で気持ちを新たにできると思っていたので、とても残念でしたが仕方ないですね。大学からオンライン授業に切り替えるという連絡があったとき、一番不安になったのはいつになったら友だちと直接会って話ができるようになるのだろうか、ということでした。また、自宅のネットワーク環境でオンライン授業に対応できるのか。そもそ

もオンライン授業でしっかり学びが身につくのだろうかなど、さまざまな不安を感じました。実際に始まってからは、オンラインでのレポート提出や資料の印刷などのやり方がわからなくて混乱しましたし、パソコンやプリンタの調子が悪くなったときに欠席扱いになるのではという不安もありました。また、対面授業であれば筆記試験での成績の評価がふつうでしたが、オンラインになって、レポート課題で評価を行う科目が増えました。レポートが増えたことで、目が疲れたり、肩こりや腰痛が起きたり…。でも、良かった点もあります。提出物を大学まで赴いて提出する必要がなくなり、メールなどで提出できることになりました。また、朝大学に行く支度の時間が減ったことで、ゆとりを持って授業に出席できるようになりました。Google Classroomの機能を活用することで、先生たちへの意見を出しやすくなり、質問も気軽にできる部分は、対面授業よりも良い部分だと思います」。

この1年間、コロナ禍での授業を経て、後輩に伝えたいことや今後の進路について思うことはありますか？

「パソコンやプリンタなどは最低限必要になります。ただ、トラブルが起きて自宅でオンライン授業が受けられなくても、大学のOA教室を開放してくれるので、心配しすぎなくても大丈夫です。コロナ禍によって生活様式が大きく変化し、不安やストレスを抱えながら生活する人が増えました。私は地域で暮らす方々の健康問題や家族看護に関心があるので、心身の健康問題に寄り添い、その人らしい生活を支えられる看護師になれるよう、残された学生生活を頑張っていきたいと思います」。



移動時間や空きコマを有効に活用。 学習意欲も向上できました。

看護学部2年生の鈴木南美さんにもお話を伺いました。

「大学から授業開始の延期やオンライン授業についての連絡があって、とても不安な気持ちになりました。大学に行くことで友だちと仲良くなり、刺激を与え合ったりできていたのに、一人で授業を受けるのは寂しいと思いました。でも一方では、初めての試みであることに、どんな授業になるのかという期待感もありました」。

実際にオンライン授業を受けてどう感じましたか？

「移動時間や空きコマを家事や自己学習に充てられたので、時間を有効に使うことができました。また、疑問に思ったことをすぐにチャットなどで先生に聞いたことも

学習意欲の向上につながったと思います。事前学習などが必要だったことは負担に感じましたが、時間配分で自己管理能力が上がったと思います。デメリットとしては資料印刷の費用がかさんだこと、周囲の進行状況が見えなくて、刺激を受ける機会が減ってしまったことです」。

今後について思うことはありますか？
「私は看護師と保健師の資格を取得したいのですが、3年生になってから実習ができなかったら、現場で役に立てないのではという不安を感じています。コロナ禍の中、看護という仕事が人の命に直接関わる重要な役割を持っていることを改めて感じました。大切な役割を全うできるよう、努力を続けたいと思っています」。

INTERVIEW

08

オンライン授業を受けた学生

看護学部2年生

鈴木 南美さん



すぐに現場で求められる「自己管理」を 今から理解し、実践できるように。

今回、オンライン授業に切り替えずに対面授業を継続すると判断した介護福祉学科の湊学科長にお話を伺いました。

「新型コロナウイルス感染を防ぐため、看護学部ではオンライン授業への切替を選択しましたが、介護福祉学科は幸いにも学生数が少なく密を避けられることと、2年課程の短期大学として卒業後ただちに現場に立つ人材を養成していることなどに鑑み、対面授業を継続するという決断に至りました。もちろん、学内での危機管理の側面から悩むところはありましたが、現場実習が多いという現状と、社会に出ればすぐに自己管理を求められるということを踏まえて、リスクがあることを前提としながらも学生が対面や実習で学ぶ機会をそのま

ま継続したいということになりました」。

感染防止策を取りながらの対面授業で感じたことはありましたか？

「複数回のオリエンテーションを通して感染拡大防止の大切さを理解してくれました。教員側が驚くほど、学生たちは真剣に取り組んでくれたと思っています。現場で実習を断られてしまうのではという不安もありましたが、危機意識の共有が出来たことで、多くの福祉施設が受け入れてくれたことは、とても有難かったです。今後、コロナの状況によっては介護福祉学科でもリモートでの対策を迫られることがあるかもしれません。その都度、状況に応じて学生たちに最善の学びの場を提供できるように、模索していきたいと考えています」。

INTERVIEW

09

対面授業の継続に尽力

介護福祉学科 学科長

湊 直司 教授



秋田経済同友会を通じて 本学で学ぶ学生の支援に ご寄付をいただきました

10月15日に秋田大学で
行われた寄附金贈呈式



このたび本学は、一般社団法人秋田経済同友会（代表幹事：佐川博之 秋田魁新報社社長）を通じて、学生支援のための寄附金をいただきました。

今回の寄附金は、新型コロナウイルス感染拡大により、秋田県内の大学で入学式の中止や新学期の授業開始の延期などさまざまな影響が生じる中で、県内の大学生が各家庭の収入減少に加え、学生のアルバイト収入の減少もあり、就学資金はもとより生活費も深刻な問題になっている状況に鑑み、秋田県内の大学・短期

大学・高等専門学校など14機関で構成する「大学コンソーシアムあきた」（理事長：山本文雄 秋田大学学長）から同会に学生支援の要望を行い実現したもので、10月15日に秋田大学において寄附金贈呈式が開催されました。

本学は今回の寄附金を本学独自の「貸与型奨学金」の拡充に充て、ひとりでも多くの学生が本学における学びを継続し、秋田県民の保健・福祉を支える人材として社会に巣立つことを期待しています。

【本学へのご寄付のお願い】

本学は1996年の開設以来、赤十字の「人道：Humanity」の精神を受け継ぐ、東北地方で唯一の赤十字高等教育機関として、看護教育・介護福祉教育を行っています。今後も現代社会や地域のニーズに応える新たな大学像を目指し、高大連携授業や出前講座の実施、大学院などを活用した学び直しの拡充などに邁進してまいります。本学のさまざまな取り組みをご理解いただき、皆さまの暖かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

■ゆうちょ銀行（郵便局）からのご寄付の手続きについて

【大学（看護学部）へのご寄付】

口座記号・番号：02210-9-142099
加入者名：日本赤十字秋田看護大学

【短大（介護福祉学科）へのご寄付】

口座記号・番号：02200-1-122694
加入者名：日本赤十字秋田短期大学

【お願い】

- 通信欄に、ホームページへのご芳名掲載希望の有無をご記入ください。
- 寄付金の使途にご希望のある方はお書き添えください。
例）実習室の充実・防災教育の推進・職員研修の充実など

【税制上の優遇措置】

本学へのご寄付は、特定公益増進法人に対する寄付として、所得税の税制上の優遇措置を受けることができます。寄付受領後に、免税に必要な「受領書」などをお送りします。

寄付の詳細は
本学公式
Webサイトを
ご覧ください。

【問い合わせ先】

事務局 経理課
電話：018-829-3014
FAX：018-829-3030
E-mail：keirika@rcakita.ac.jp